

明治図書出版株式会社『楽しい理科授業』2009年1月号

特集「移行期”新教材の授業”どう構想するか」

1 < 4人の先生にお聞きしました >

新理科の全体像と移行準備のポイント

強調点として見出しを掲げる

1 / 2 ページ

20字×34行×2段（のうち1段）

30行を目安とすること

見出し：

子どもにとっての系統性

茨城大学教育学部理科教育講座 大辻永（准教授）

5	通常、「系統性」という言葉は学問分野について用いるのであって、「子どもにとっての系統性」という表現はふさわしくない。しかし、今回の学習指導要領の改訂にあたり、実際の授業を先生方が構想する上で重要だと思われるポイントを、敢えてこのように表現してみたい。
10	たまたま出席する機会を得た教科書編纂会議では、学習指導要領の「解説」が出た6月を過ぎても、季節的な単元の配置、単元内の重点の置き方、どのような学習を組み立てるか、導入はどうするかなど、子ども達の学習を想定しつつ教科書を編纂する作業は困難を極めていた。学習指導要領や「解説」で縛られていても、自由度が高く、無数の授業が想定できるのである。では、何が個々の授業や単元の決め手となってくるのであろうか。
15	授業は一度きりの芸術作品のようなものだ。その時の学習者集団、個々の児童生徒、その時の教師と、地域の素材、他教科も含めた既知の経験、知識、技能。さらに、一時間一時間がワン・シーンになりそれらが重なって、子ども達が主人公になって演じきる中で、子ども達は成長する。学習指導要領の改訂は、
20	
25	予め決められる話しの筋、原作に手を入れる

30	<p>ほどの重大事である。</p> <p>もう一度、子ども達の見線に立って、子ども（なり）の探究（問題解決）の流れ、その筋道を想定した連続性を、先生方から見取りから考え直してみてもいいかであろうか。</p>
35	